

池田大作

Daisaku Ikeda

21世紀の ナポレオン

歴史創造のエスプリを語る

精神

シャルル・ナポレオン

Prince Charles NAPOLEON



第三文明社

21世紀の ナポレオン

歴史創造のエスプリを語る
——精神——

池田大作

Daisaku Ikeda

シャルル・ナポレオン

Prince Charles NAPOLEON



第三文明社

せい き れき し そうぞう 精 神 かた
21世紀のナポレオン——歴史創造のエスプリを語る

2011年7月3日 初版第1刷発行

著者 いけ だ だいさく
池田大作
シャルル・ナポレオン

発行者 大島光明

発行所 株式会社 第三文明社
東京都新宿区新宿1-23-5
郵便番号 160-0022
電話番号 03-5269-7145（営業代表）
 03-5269-7154（編集代表）
振替口座 00150-3-117823
URL <http://www.daisanbunmei.co.jp>

印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 牧製本印刷株式会社

©IKEDA Daisaku / Charles Napoléon BONAPARTE 2011
ISBN 978-4-476-05049-3

Printed in Japan

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。ご面倒ですが、小社営業部宛お送りください。
送料は当方で負担いたします。
法律で認められた場合を除き、本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

21世紀のナポレオン——歴史創造のエスプリ^精を語る^神……
目次

対談者紹介……………4

第1章 「人間の世紀」「共和の時代」へ……………8

第2章 人間精神のグローバル化を……………33

第3章 新たな家族像を求めて……………55

第4章 未来を開く人材育成……………77

第5章 変革こそ青年の特権……………101

第6章 新時代のリーダーシップ……………127

第7章 世紀の先頭を駆ける……………153

第8章	逆境に勝つ人間学	181
第9章	ロマンの人生を生きる	208
第10章	文化の遺産こそ永遠の宝	235
第11章	不滅のナポレオン法典	259
第12章	「ヨーロッパ統合」の精神的源流	284
第13章	平和共生の「世界合衆国」を	310
注		338
索引		367
ナポレオン関連略年譜		103・167

【引用文について】 編集部注は＝の下に記した。読みやすくするため編集部でふりがなをつけたり、現代表記に改めた箇所もある。出典は二度目以降は（前掲『 』）で示し、直後に連続して同じ出典を示す場合は（同前）と記した。

装幀・本文レイアウト／株式会社トップグラフィックコミュニケーションズ

第1章 「人間の世紀」「共和の時代」へ

ナポレオンの精神を未来へ

池田 「天才とはおのが世紀を照らすために燃えるべく運命づけられた流星である」（オクタヴ・オブリ編『ナポレオン言行録』大塚幸男訳、岩波書店）

ナポレオンは、歴史の新たな舞台を切り開く、この自己への強烈な確信を終生手放すことなく、五十年余の生涯を駆け抜けました。その鮮やかな光芒は、同時代のみならず、今日の世界をも照らしているといつてよいでしょう。

二〇〇九年は、ナポレオンの生誕二百四十周年——。時を超えて、「世紀の巨人」が二十世紀に投げかけるメッセージは何か。ナポレオンの精神を受け継ぎ、ナポレオン家の当主として世界的に活躍されるシャルル・ナポレオン公と、このように意義深い対談の機会を得



ナポレオン公から池田SGI会長に「国際ナポレオンアカデミー」名誉会長の称号を授与（2006年5月3日、東京・八王子）
©Seikyo Shimbun

ましたことを、大変うれしく思っております。
ナポレオン こちらこそ、非凡なる識者と対話を重ねてこられた池田SGI（創価学会インタナショナル）会長の対談者として名を連ねる榮譽に浴することができ、心より御礼申し上げます。

会長は、これまで各界の方々とは五十有余に及ぶ比類なき対談集を発刊してこられました。そのことに、私は深い感銘を受けております。
池田 恐縮です。実は私は、かつて『波瀾万丈のナポレオン』（潮出版社）と題して、フランスや日本の近しい識者の方々とナポレオンの人間像を語り合った一書を発刊したことがあります（一九九七年）。この対談では、その

折り語り合ったナポレオンの名言などにもあらためて触れていきたいと思っております。

ナポレオンという一人の人間が成し遂げたこと、また、その後のヨーロッパに残した文化的遺産は、あまりにも多い。その一方、戦争や遠征を重ねるなかで、周辺の国々に残した傷痕も少なくありません。現代にあっても、その歴史的評価は功罪相半ばしているといつてよいでしょう。

しかし、「勝利と栄光」と「敗北と挫折」という、まさに、稀代の革命児と呼ぶにふさわしいナポレオンの波瀾万丈の人生が、今なお多くの人々の心をとらえてやまないのも確かです。

今日の世界に与えている影響も少なくありません。また、ナポレオンが夢に描いていた「一つのヨーロッパ」も、現在、EU（ヨーロッパ連合）という形で、一つの結実をみえています。二十一世紀に入り、グローバル化（地球一体化）が急速に進み、大変革期を迎えつつある今だからこそ、再びナポレオンの生涯とその時代に光を当てながら、「歴史の教訓」と「人類へのメッセージ」を汲み取っていくことが重要ではないかと、私は考えています。

ナポレオン 会長がおっしゃるように、ナポレオンは——評価がさまざまに分かれるにせよ

——人類の歴史に大きな足跡を残した人物でした。

それだけに私も、物心ついて以来、「ナポレオン」という名前を背負っていることに重みを感じてきました。

しかし、両親から「名前には何の特権もない」と言い聞かされてきたこともあり、あくまでも自分の力で人生を切り開いてきたつもりです。

今、ナポレオンが亡くなった年齢（五十一歳）を超えて、私は強く決意しています。「ナポレオン」という名前は、歴史のなかでのみ意味を持つものではない。私は、この「ナポレオン」という名前を、未来へ前進するために、善のために使っていきたい——と。

池田 崇高な精神に胸を打たれます。

ナポレオン公は、「国際ナポレオンアカデミー」の後援者を務める傍ら、「ナポレオン歴史協会」の名誉会長や、「ナポレオン歴史都市欧州連合」の会長等の重責を担ってこられました。

また、ナポレオンの生まれ故郷であるコルシカ島の政治・経済や文化の発展に尽くされ、コルシカ島の環境協会会長も務められました。

さらに、歴史作家としても著名でられます。

二〇〇六年五月に初めてお会いした際、ナポレオン公から頂戴した二冊のご著作『ポナバルトとパオリ』『ポナバルトと反骨精神』も、大変興味深く拝見させていただきました。

ナポレオン それは恐縮です。

会長との出会いは、私にとっても忘れることのできない、大変に光栄な出来事でした。

創価学会の皆様方にとって大変に重要で意義のある「五月三日」という記念日に、私を歓迎してくださった。このことは、会長と私との深い絆を象徴する出来事であったと確信しております。

池田 ナポレオン公とお会いした八王子市の東京牧口記念会館は、一九九三年秋に、公の母君であられるナポレオン妃をお迎えした場所でもありました。

実は、母君こそ、この年に完成した東京牧口記念会館に最初にお迎えした賓客だったのです。それ以来、ナポレオン妃を迎えた部屋を、「ナポレオンの間」と呼んできました。その同じ部屋でナポレオン公とお会いできたことに、私は不思議な縁を感じたものでした。ナポレオン 東京牧口記念会館の壮麗なたたずまいは、今も深く印象に残っております。



ナポレオン妃と会見（1993年10月8日、東京・八王子）

©Seikyo Shimbun

とくに会見の部屋は、荘厳な光に輝いていました。

私は、池田会長の全身に漲っている「生命の力」「知性の力」「精神の力」に圧倒されました。会長に「二十一世紀のナポレオン」を見る思いがいたしました。

創価大学の学生の皆さんをはじめ、若い方々が会見の場に同席されていたことも印象的でした。

あのとき、会長は私に、「これから、社会のため、フランスのために、大いなる使命を抱いて立ち上がってください」と、力強く励ましてくださいました。そのご厚情を、私は今も決して忘れることができません。

私は、会長が人類のため、平和のため、先頭に立つて戦つてこられたことを存じております。私も会長と同じ心で、進んでまいりたい。

会長は、思想家であられるとともに、現実の課題に責任を持つて取り組んでおられます。知的関心と現実的関心を結び合わせる会長の手法は、まさにナポレオンを想起させます。会長の卓越した行動は、ナポレオンが議長を務めた「国務諮問会議」や、彼自身が会員でもあった「フランス学士院」等の機関における、傑出した知性との対話様式と軌を一にするものです。

ですので、池田会長に、私が後援する「国際ナポレオンアカデミー」の名誉会長になつていただくことは、私のなかでは、ごく自然に生まれた提案でした。

ナポレオンの生涯と思想を永續させ、世界に広めゆくことを目的に創設された同アカデミーは、国際的な著名人や有識者を名誉委員会と名誉學術委員会に迎えています。

池田　あまりにも過分な評価です。

ナポレオンは、日本でも人気を誇る歴史の英雄です。私が創立した東京富士美術館では、これまで、ナポレオンに関する展覧会を、三度にわたつて開催してきました（「大ナポレオン

展」(一九九三年)、「特別ナポレオン展」(一九九九年)、「栄光の大ナポレオン展」(二〇〇五年)。全国各地で行われた巡回展をあわせると、四百五十万人もの方々が鑑賞に訪れました。

ナポレオン よく存じ上げています。

東京富士美術館は、その創立時から、絵画作品や歴史的資料をはじめ、ナポレオン家ゆかりの作品の収集・保存に関心を持たれ、広く市民に一般公開することに多大な配慮を払ってられました。それに対して私たちナポレオン家が非常に大きな感動を抱いていることを、私はこの場をお借りして、明確に申し上げたいと思います。

私も、二〇〇六年五月、「栄光の大ナポレオン展」の掉尾を飾った神戸展での記念式典出席させていただきました。深く壮大なスケールの展覧会を鑑賞した後、私はどのように挨拶をしたらよいのか、言葉に詰まりました。

日本の多くの人々が、本国であるフランス以上に、ナポレオンを深く知りたいと思われる熱意が伝わり、うれしくなったからです。

仮に今、ナポレオンや私の先祖たちが生きていて、池田会長とごいっしょさせていただいたならば、計り知れない大きな喜びを、私と共に分かち合っていたことでしょう。

ナポレオン家の誉れの気風

池田 寛大なお言葉に、心から感謝申し上げます。

ナポレオン公は、大震災を乗り越えた神戸で開催された記念式典の名スピーチで、こう語ってくださいました。

「ナポレオンは、壮大な生命力で、多大な社会的・文化的業績を短期間で成し遂げ、二百年経った今も、世界中に影響を与え続けています。

ナポレオンをテーマにした展覧会が、阪神・淡路大震災からの復興、すなわちルネサンスを象徴する神戸という地で、大成功のうちに幕を閉じることは、大変に意義深いことです。」と。

関西の人々の琴線に触れる言葉でした。

おっしゃるとおり、ナポレオンの魅力の一つは、新しき時代の創造を目指し、前進また前進の不撓不屈の行動を貫き通した「壮大な生命力」にあるといつてよいでしょう。

その精神を受け継ぐナポレオン家には、代々、現実の世の中を、よりよくしようと努力



関西国際文化センターで開催された「栄光の大ナポレオン展」を鑑賞するナポレオン公（2006年5月5日、兵庫・神戸）
©Seikyo Shimbun

することが、家族の地位などよりも、はるかに重要であると考える。という気風が伝えられてきた、とうかがっています。

ナポレオン そのとおりです。歴史的な課題から逃げることなく、現代世界の諸問題に對して解決への方途を模索し、世界に何らかの意義を与えるよう努力することが、私に課せられた義務であると思っています。

池田 気高き 志 です。

父君であられるルイ・ナポレオン公が、第二次世界大戦中、レジスタンスの勇者としてナチスと戦い抜かれたことも有名です。父君は、その戦いのなかで二十回も命の危険に身を晒されたとうかがっています。こうした

功績により、父君は、ナポレオンが創設したレジオン・ドヌール勲章を受けておられますね。

ナポレオン ええ。私の父は、ナポレオン家が亡命していた一九一四年に、ベルギーで生まれました。

ナポレオン家は、十九世紀末から亡命を余儀なくされ、フランス国内に住むことはできなかったのです（一一八八六年に制定された法律は、かつてフランスの君主であった者の子孫が国内で居住することを禁止した）。

祖父は、ベルギー王の娘と結婚し、ベルギーに身を置くことになりました。ベルギー王家に生まれた女性を母に持ち、ベルギーで育った父は、王室の習慣を尊重する環境のなかで育ちました。

「フォーマリズム」（形式主義）のもとで育てられた父は、フランスのレジスタンスに参加することを禁じられていました。しかし、一九三九年、戦争が勃発したとき、祖国フランスに仕えたいとの思いから、偽名を使って、外国人を徴集するエリート部隊である「外国人部隊」に志願したのです。

池田 父君は、当時の心情を、どのように語っておられましたか。